

ハイパーエージェンシーとハイテク系寄付者： 現代の新たな慈善家たちに関する新理論

ポール・G・シェルヴィッシュ*

社会学名誉教授、創設所長（退任）2023年2月——同様のタイトルのワーキングペーパーに基づ

く

現代における富と主体性のプロジェクト

必要性に応えるための、ひとつの方法に過ぎない。

「社会的行動は.....他者の過去、現在、あるいは予想される
将来の行動に向けられることがある。」
-マックス・ウェーバー（『経済と社会』p. 22）

あらゆる時代の富の保有者に共通する特徴は、少なくとも物質的な領域において、最大限の選択肢——すなわち「ハイパーエージェンシー」——を享受している点である。これには、自分自身がどのような人間になりたいか、そして自分自身、家族、そして周囲の世界のために何をしたいかを決定し、それを実現することが含まれる。

今日、物質的なニーズを満たすための経済的目標に近づき、達成し、あるいはそれを上回る人々がますます増えており、その年齢もますます若くなっている。かつては、ごく少数の支配者、將軍、商人、金融家、実業家だけの特権であった富の水準が、今や大規模な集団、さらには文化全体を特徴づけるものとなっている。歴史上初めて、広範な物質的な選択能力と、人格における精神的な能力とをどのように調和させるかという問題が、一国の国民の多くに突きつけられているのである。

我々は、こうした傾向やその他の動向を、「慈善活動の新しい物理学」の一部として論じている（Schervish and Havens, 2001, 2002）。

わが国および世界の人口のますます多くの層にとって、21世紀における説得力のある新たな問いには、次のようなものがある。

- 豊かさの時代において、個人は自分自身、家族、そして社会における自発的な経済的道德をどのように形成していくのか？
- 選択肢の量が飛躍的に増加する中で、いかにしてその質をより深く発展させることができるのか？
- 富の獲得がもはや最優先事項ではなくなった今、富をどのようにして人生のより深い目的を達成するための手段とすることができるのか？

慈善活動により直接的かつ積極的に関与することは、富を持つ人々が、私が「道徳的自伝」と呼ぶものを識別し、実践するという

ボストン・カレッジ
ボストン・カレッジ
AND PHILANTHROPY

センターについて

「富と慈善活動センター（CWP）」は、ポール・シェルヴィッシュの引退に伴い、2015年に閉鎖されました。1972年に「社会福祉研究所」として発足した同センターは、豊かさの時代における精神性、富、慈善活動、および文化生活のその他の側面を専門とする学際的な研究センターでした。「富と慈善活動センター」は、経済的余裕と慈善活動の関係、慈善活動への関与の動機、そして「ケア」の根底にある意味と実践について、広く認められた権威でした。同センターは、富の移転や慈善活動の黄金時代に関する画期的な研究をはじめ、社会的、哲学的、神学的、統計学的な研究で知られています。

連絡先 ポール・G・シェルヴィッシュ 携帯電話

：(617) 270-7674

Eメール： paul.schervish@bc.edu

報告書、ワーキングペーパー、および掲載記事をご覧になる
には、以下にアクセスしてください：

 ポール・G・シェルヴィッシュ
年別レポート 履修論文一覧

：

富 (Schervish 2006) あるいは、富を持つ人々が自らの莫大な経済的能力を、それに見合った道徳的指針と結びつける方法。

事業を継続・開始すること、投資を行うこと、そして家族や友人を大切にすること——これらが賢明に選択されれば、いずれも道徳的伝記における等しく高貴な道である。これらすべては富の道徳的伝記であるだけでなく、実は「ハイパーエージェンシー」でもあることが判明している。

エージェンシーとハイパーエージェンシーに関する背景

本論文の目的は、「ハイパーエージェンシー」という理論的概念を展開し、それをを用いて、特にハイテク分野の寄付者、そしてより一般的には富裕層の寄付者の慈善活動を解釈することにある。

過去30年間にわたり、個人が状況によって制約を受けつつも、同時にその状況を変容させる実践を理解するための概念的ツールとしての「エージェンシー」という概念への関心が、著しく再燃している (Giddens 1984; Sewell 1992; Emirbayer and Mische 1998)。こうした個人の実践への重点は、個人が社会構造の中でどの位置に配置されているかを図式化し、それらの位置によって決定される関係パターンに焦点を当ててきた構造主義的分析に対抗しようとする研究者たちの取り組みから、部分的に派生したものである (例: Wright 1997; Wood 1995)。「位置」の分析とは対照的に、このアプローチでは、所定の条件の範囲内ではあるものの、比較的自由な選択を行う主体 (エージェント) の能動性と実際の実践に焦点が当てられている。このアプローチは、個人が自発的に、そして潜在的に変革的な影響を自らの生きる世界に及ぼすことを強調する、個人の慈善活動に関する理論と自然な親和性を持っている。

過去40年間にわたる富と慈善活動に関する我々の研究は、その大部分において

ビジネスや政治の領域、さらにはライフスタイルや慈善活動の領域において、富の保有者が持つエンパワメントを特徴づける独自の性質を特定することであった (Schervish et al. 1994; Schervish 1997)。我々の調査結果によれば、少なくとも物質的な領域においては、富の保有者の階級的特徴は「ハイパーエージェンシー」である。

ハイパーエージェンシーとは、個人が比較的独力で、自らが望む世俗的な成果を生み出すことを可能にする一連の気質や能力、ならびに、自身や他者が主体性を発揮するための条件を形成する能力のことである。もしエージェンシーが、社会的に与えられたルールや資源の範囲内で選択を行う能力であるならば、ハイパーエージェンシーは、それらのルールや資源の創造者あるいは生産者となる能力である。エージェントが限られた可能性の範囲内で、自分にとって最も望ましい、あるいはふさわしい場所を見つける者であるのに対し、ハイパーエージェントは、自分自身のためだけでなく、他者のためにも、そうした可能性そのものを創り出す者である。エージェントが達成するために社会的、政治的、宗教的、あるいは慈善的な運動の助けを必要とするようなことも、ハイパーエージェントであればほぼ独力で達成することができる。

この用語を (深夜の電話での会話の中で) 考案してくれたアンドルー・ハーマン氏のおかげで、私たちは富と慈善活動に関する研究の初期段階から、「ハイパーエージェンシー」という概念を発展させ、活用してきた (Schervish and Herman, 1988)。しかし、これまでのところ、私はこの概念を、ハイテク分野の富裕層による寄付パターン、ひいては今日の新たな慈善家たちに関する広範な研究の根本的な説明概念として用いてきたにもかかわらず、エージェンシーに関する理論的文献との関連性については提示してこなかった。

本論文の第1節では、社会学の文献を参照し、ハイパーエージェンシーに関する一般的な理解を構築する上で関連性のある、エージェンシー理論の側面を特定する (Emirbayer and Mische 1998; Alexander 1992; Archer

では、

ンシー

ハイパーエージェンシーを、特定の気質や能力を備えた独特なエージェンシーの形態として、その意味を詳述する。第3節では、ハイテク分野の寄付者がビジネスや慈善活動において示す気質や実践を分析するための主要な解釈概念として、ハイパーエージェンシーを用いる。結論では、ハイテク分野や今日のその他の「新しい慈善家」を理解する上で、ハイパーエージェンシーが持つ示唆について示す。

1. エージェンシーに関する社会学的考察

本論文では、エージェンシーに関する文献の主要な方向性のうち、一部のみを概観し、エージェンシーおよびハイパーエージェンシーに関する私の実証的理論の統合へと進む。

社会構造と人間のエージェンシーという二項対立を乗り越える上で、ブルデュー（1984）や、とりわけ「構造の二重性」という概念を提唱したギデنز（1979、1984）、さらにギデنزの理論を包括的に再構築したシューウェル（1992）やエミルバイヤーとミッシュ（1998）らによって、大きな進展が見られた。ギデنزの構造化理論において、社会構造は「仮想的」な存在に過ぎず、比較的高いレベルの反射的自己意識を備えた個々の主体によって具現化される、時間と空間上の特定の瞬間にのみ存在する。したがって、社会構造は固定された構造物でも、それ自体として存在するものでもない。それは、過去・現在・未来にわたって展開する主体性のプロセス、すなわち *構造化* である。同時に、エージェンシーは、現在存在するルール（シューウェルは「コード」と呼ぶ）や資源なしには成立しない。これらのルールと資源は、個人および集団のエージェンシーを可能にする一方で、それを制約もする。ギデنزにとって、構造は安定性と革新性を同時に提供するという点で二重性を持つ。構造化理論は、定型化された制度的実在との関係において、人間の主体性が持つ創造的かつ変革的な可能性を説明する。ギデنزにとって、主体性とは、認識されている条件や認識されていない条件という文脈の中で生じる、個々のアクターによる目的を持った実践であり、意図された結果と意図せぬ結果を生み出すものである。

能動性とは、個人が

であり、その中で彼らは変革的な再生産を達成するための力や能力を行使する。言い換えれば、能動性とは、与えられた構造的条件から始まり、構造的結果の変革的な再生産をもたらす個人の実践である。ギデンズは、「変革的な再生産」という概念を強調することで、あらゆる行動が時間・空間・環境において唯一無二であるため、能動的な行為が単に過去を再現することなど不可能であることを示そうとしている。

同時に、いかなる変化も時間と空間におけるその起源と有機的に結びついているため、エージェンシーの行為が完全に変革的なものになることは決してない。

エージェンシーの理解に対する第二の重要な貢献は、エミルバイヤーとミシェ（1998）によるものである。彼らは、過去、現在、未来に焦点を当てたエージェンシーの「*和音的三元構造*」を提示している。これは、ギデンズの「構造的条件、エージェンシー、変革的結果」という三元構造と似ている。エミルバイヤーとミシェは、主体性を「*異なる構造的環境——行動の時間的・関係的文脈——に対するアクターによる時間的に構築された関与であり、習慣、想像力、判断の相互作用を通じて、変化する歴史的状況が提起する問題への相互的な対応として、それらの構造を再生産すると同時に変容させるもの*」と定義している（著者強調）（p. 970）。

コード的三項の第一の側面は、反復的あるいは循環的な要素であり、これは主体が過去とどのように関わるかに関連している。「これは、*実践的活動に日常的に組み込まれている過去の思考や行動のパターンを、主体が選択的に再活性化すること*を指し、それによって社会的宇宙に安定性と秩序を与え、時間の経過とともにアイデンティティ、相互作用、および制度を維持するのに寄与する」（著者強調）（p. 971）。第二の側面は未来志向である。これは「*投射的要素*」であり、ギデンズの「将来に起こりうる事象の創出に向けた戦略的行動」という概念に類似している。「*投射性とは、行為者による将来の行動の可能な軌跡の想像的な生成を包含するものであり、*

、その中で、受け継がれた思考や行動の構造が、未来に対する行為者の希望、恐怖、欲望に関連して創造的に再構成される可能性がある」(p. 971)。エージェンシーの第三の側面は、現在に関連している。これは、過去と未来をどのように結びつけるかを決定する実践的・評価的要素である。「現在進行中の状況から生じる新たな要求、ジレンマ、曖昧さに対応して、行動の複数の可能な軌跡の中から、実践的かつ規範的な判断を下す行為者の能力」(著者強調)(p. 971頁)。

私は、エミルバイヤーとミシェの主張に同意する。すなわち、これら3つの要素のうち、最も軽視されてきたのは投射的要素である。ギデンズをはじめとする研究者たちは、自らの理論においてその側面を優先的に扱っていないにもかかわらず、エージェンシーを条件づける社会構造の側面についてより多く論じる傾向にある。彼らは、与えられた状況がいかにして一連の制約と可能性として機能し、主体者の自発的な能動性を制限すると同時に、それを可能にするかを強調している。エージェンシーの変革的あるいは形成的な側面が理論から欠落しているわけではないが、それらの側面は、エージェンシーに先行し、それを条件づける構造の規則や資源ほどには強調されていない。

ギデンズやエミルバイヤー、ミッシュラの研究は、主体性を「行為者が過去と未来の間の隔たりを埋めるための戦略的実践の集合体」と捉える私の理解を具体化している。

私にとって、エージェンシーとしての慈善活動をより広く総合的に理解するための出発点は、アリストテレスが『ニコマコス倫理学』(1999)において、選択と徳の関係について広範に論じている点にある。アリストテレスは、人生の目的は幸福であると述べ、幸福とは、自分が現在いる場所と、ありたい場所との間の隔たりを埋めることによって達成されることを示唆している。この隔たりは、選択を行うことによって埋められる。規範的に最も優れた選択は、実践的知恵、すなわちフロネシスに貫かれている。したがって、主体性とは、主体が直面する可能な選択を実行に移し、

ンシー

生成から完結へ、歴史から志へと向かう絶え間ない移行を構成する一連の実践である。賢明な選択には、自発的に行動する自由と、知恵という美德の両方が必要であると、アリストテレスは主張する。自由なくして美德はあり得ず、美德なくして真の自由も存在しない。能力がなければ選択の可能性はなく、同様に、美德がなければ能力を正しく導くこともできない。

したがって、賢明な選択を行うことは、道徳的能動性の実践、すなわち能力と人格、あるいは道徳的指針の結合である。ここで私が、知恵や賢明な選択を構成する要素について、特定の内容を提示していない点に留意されたい。

実践的知恵とは、行為者を動かす、感化された、あるいは良心的な規範的志向として理解される。これは、エミール・デュルケームが「道徳的に志向された行動」として意味するものに類似している。彼や社会学の黎明期の他の研究者たちは、この概念をラテン語の「*mores*」(モレス)に由来するものと見なした。これは、慣習、伝統、あるいは価値を帯びた規範的潮流を意味し、行為の枠組みと志向を提供するものである。

したがって、私の枠組みにおいて、主体性とは、社会のおよび個人的な条件を踏まえて、実践的・評価的な選択を実行し、私たちが志向するプロジェクトの達成に向けられるものである。その意味で、主体性は、生成(genesis)、目的(teleesis)、そしてこの二つを結びつける選択を中心に展開する。これは、エミルバイヤーとミシェが「ルーチン」「目的」「判断」と呼ぶものである(p. 963)。過去に関して言えば、エージェンシーは、思考、感情、行動に関する規範的・実存的な枠組み、および人的・物的資源から成る条件の中に位置づけられる(ギデンズ、1984; シューウェル、1992)。ひいては、エージェンシーは、個人の規範的かつユートピア的な枠組みを実現すること、ならびに人的・物的資源の新たな配分や秩序を創出することを目指している。エージェンシーとは、能力と道徳的志向という(個人的および社会的な)目的論的成果を生み出すために、能力と道徳的基盤という(個人的および社会的な)発

7
生的条件や出発条件を活用する、人間の選択に基づく因果的实践の領域である。

ハイパーエージェ
ンシー

2. ハイパーエージェンシー

私はすでに、エージェンシーに関する研究の多くが、未来ではなく過去の問題を中心に展開していることを指摘した。エミルバイヤーとミシェによれば、未来とは、社会的アクターが「自分たちがどこへ向かっているのか、どこへ行きたいのか、そして現在の位置からどのようにそこに到達できるのかについて、変化し続けるイメージを構築する」領域である（p. 984）。これは重要な点である。なぜなら、一部の現代の理論家は、富裕層やその他一見能力を備えたアクターが、制約を受けずに新たな秩序を構築する能力を有することを否定する傾向があるからだ。例えば、アバークロンビー、ヒル、ターナーは、著書『支配的イデオロギー論』（1980年）および『資本主義の主権的個人』（1986年）において、恵まれた個人でさえ歴史の進路を決定することはできないと論じている。

エミルバイヤーとミシェの用語で言えば、アバークロンビー、ヒル、ターナーは、個人が自らの置かれた状況や目指すべき方向について、内的あるいは外的な言説をどのように表明しようとも、経済組織の制約——とりわけ先進資本主義における制約——が、代替的な未来の創造を決定的に制限すると主張するだろう。特に、彼らは、一方では「実効的な個人主義」というイデオロギーと、他方では資本主義の実際の仕組みや、その中で活動する経済主体の特性との間には、必然的な関連性はないと主張している。

同様に、彼らは2冊目の著書の中で、先進資本主義の官僚化が進む傾向は、個人主義や個人の有効性というイデオロギー的言説と矛盾していると論じている。自律性を持ち、主体性を発揮する個人が、目的志向的な社会的実践を通じて自らの意志を具現化できるなどということは、そもそもあり得ない。彼らは、主権的個人主義というビジョンが西洋資本主義のイデオロギーを支配しているにもかかわらず、支配階級にも被支配階級にも、そのような個人主義は存在しないと結論づけている。したがって、社会全体の構築と統治において、純粹で完全に決定的な「ハイパーエージェンシー」はあり得ない。

私は、社会の根本的な仕組みに対する支配に関するこの分析を受け入れる。とはいえ、私は、富の保有者こそが、自らの影響力の及ぶ大小さまざまな領域において、自らの願望や期待を実際の実践や組織形態に具現化できる主権的な個人であると主張する。実際、ギデンズ（1984）が主張するように、すべての個人は、特定の状況や条件下において、エージェンシーを通じて結果を形作る能力を有している——とりわけ、社会的、文化的、政治的な運動に結集した場合にはなおさらである。

要するに、私は、すべての個人が社会的・文化的に形成的な主体性を等しく発揮できるわけではないことを認識している。「ハイパーエージェント」は神ではなく、半神である。そして、私たち「普通の」個人も（制限はあるにせよ）主体性を欠いているわけではない。実際、今日、不利な立場にある個人がいかに回復力に富み、自らの主体性を認識し、行使し、拡大していくべきかという点に、再び重点が置かれているのを目撃している。とはいえ、私たち「普通の」人々の間で主体性が拡大したとしても、並外れた資質を備えたハイパーエージェントが自らの意志を投影する能力には到底及ばないことは明らかだ。一言で言えば、ハイパーエージェントでさえも制約を受けているのである。

とはいえ、並外れた物質的・心理的能力を備えた個人たちは、自分自身のためだけでなく、他者のためにも、別の未来を形作ることができる。

もう一つの留意点は、すべてのハイパーエージェントが必ずしも富の保有者である必要はないということだ（例えば、ソーントン・ワイルダーが『わが町』で指摘しているように、「一部の聖人や詩人」など）。とはいえ、すべての富の保有者は、少なくとも物質的な領域においてはそうである。富の保有者は、集団としても個人としても、自らが実現を望む結果を形作ることを可能にする物質的資源と認知的素質を、他に類を見ないほど備えている。富は、エンパワメントのための特別な能力を与える。すべての個人が主体性を行使する一方で、ハイパーエージェンシーの際立った階級的特徴は、単に受け入れ

9
だけでなく、自らが生きる社会的マトリックス
を確立する能力にある。富裕層は

ハイパーエージェ
ンシー

は、時間と空間において「*領主的な*」世俗的領域を、また内面においては*個性*という領域を構築する。その意味で、ハイパーエージェンシーは、効果的な実践を支えるだけでなく、独自の道徳的アイデンティティでもある。

ギデンズにとって、エージェンシーとは構造化のプロセスへの参加である。すなわち、主体は構造的条件の中に位置づけられ、エージェンシーを通じてそれらの条件の再生産的変容を遂行する。私にとって、ハイパーエージェントは、ギデンズの主体とは対照的に、構造的条件を構成する枠組みや資源、そして社会的成果を構成する枠組みや資源を形作る上で、質的により大きな支配力を有している。ハイパーエージェントが、自分を取り巻く世界全体を単独で完全に変革できるわけではない。しかし、彼らはビジネス、金融、家族、消費、政治、慈善活動といった日常の実践において、構造化の変革的装置を当然のこととして実行することができ、実際に実行している。

ハイパーエージェンシーの要素——能力の領域と道徳的羅針盤

『*富の福音書*』（Schervish, Coutsoukis, and Lewis, 1994）において、私は、ハイパーエージェントが生産的なエージェンシーを行使する際に活用するリソースを構成する能力の、相互に関連する3つの要素について論じている。それらは以下の通りである。

- (1) 心理的エンパワーメント——大きな期待を抱く気質、その期待の正当性、そしてそれを達成する自信；
- (2) 空間的エンパワーメント——侵入から身を守る壁を築き、自身の影響力を、直近の個人的存在範囲を超えて地理的に拡大する能力；および
- (3) 時間的エンパワーメント——過去を再構築し、現在を築き上げ、未来を結びつける能力。

明らかに、このような能力は、ハイパーエージェントが賢明で生産的な決定を下し、自身や他者にとって有益な成果を生み出すことを保証するものではない。しかし、それは、そのような個人が幅広い選択の視野を持ち、その選択が自らの目的を形作る能力を備え、その目的が他者の目的論的終極を促進あるいは阻害することを保証するものである。

前述のリソースを行使することに加え、生産的な主体性は、そのリソースの活用を導く規範的かつ実存的な枠組みを働かせる。『*富の福音*』（1994年）において、私はまた、相互に関連する側面を記述した。これらは、ハイパーエージェントの生産的エンパワーメントを秩序づけるために作用するものである：

- (1) ハイパーエージェントが、人生から与えられた機会や障害にどう対処するかを導く、美徳あるいは気概とみなされるものの日々の実践；
- (2) 個人が、ある社会的地位や個人的アイデンティティから別のものへと移行するという、人生を形成するライフコースの転換期を乗り越えるために求められる、道徳的気概に対する特別な試練；および
- (3) 癒やし、学び、許し、そして合一を求める中で、人生の大小の出来事を、生・死・再生の贖いのプロセスへと昇華させようとする衝動。

日々の美德の実践、移行期における義務的な献身、そして変容への探求は、道徳的志向の側面であり、これらが心理的、空間的、時間的なエンパワーメントと結びついたとき、主体性の意味と実践の一般的な枠組みを構成する。そして、それらが制度的に形成的な方法、すなわち単なる参加的な取り組みではなく生産的な取り組みとして実践される場合、それらはハイパーエージェンシーの意味と実践を構成する。

ハイパーエージェンシーとハイテク分野の寄付者

ここでは、ハイテク・ドナーの性格と実践の基盤となるハイパーエージェンシーの本質的な資質と気質的能力の適用について論じる。彼らは商業取引においてこのハイパーエージェンシーを生み出し、それを慈善活動へと転用している。

ハイパーエージェンシーの仕組みを展開・実証するにあたり、私は2001年1月から3月にかけて実施された『**2001年ハイテク寄付者調査**』（Schervish, O’Herlihy, and Havens, 2001）の調査結果を活用する。この調査は、Association of Fundraising Professionals（旧 National Society of Fund Raising Executives）の委託により実施され、オレゴン州ポートランドの R.B. Pamplin Corporation 社長兼 CEO であるロバート・B・パンプリン・ジュニア博士によって発案・資金提供された。本調査では、4つの主要な問いについて探求を行った。第一に、ハイテク分野の富裕層がビジネスを通じて富を蓄積する方法と、それを慈善活動に配分する方法との関連性である。第二に、ハイテク分野の富と慈善活動を巡る、個人的、事業的、および慈善活動上の諸問題の範囲を特定することである。第三に、ハイテク分野の寄付者による慈善活動の軌跡を理解し、改善するために、調査結果が持つ示唆を明らかにすることである。4つ目の課題は、調査結果を応用して、慈善活動全般における新たな課題や展望に対する理解を深めることである。

感謝、同一化、連帯といった力学と結びつくと、世界構築は彼らの自宅や企業の門前で止まることはない。それは、政治、地域社会、宗教、そして慈善活動（それを選択する人々にとっては）を含む、彼らのあらゆる関与へと広がっていく。富裕層は、その性格上、他の人々よりも利己的で近視眼的であるわけでも、社会的に責任感が強いわけでもない。大きな期待や壮大な志は、経済的背景を問わずあらゆる人々の心に宿っている。富裕層と他の人々との違いは、彼らが自らの欲望の実現に直接影響を与えることができるため、その期待や志を具現化することについて、より正当な自信を持てるという点にある。ヒューレット・パッカード社の元幹部（身元を特定できる情報はすべて変更済み）は、心理的なエンパワーメントがもたらす「できる」という前向きな姿勢を次のように語っている：

スタートアップに関わる若いハイテク起業家たちにとっての魅力は、小規模で機動性が高く、俊敏な環境で働けるという興奮にあると思います。そこでは「さあ、SWATチームのような感じで何かを成し遂げよう」と言え、実際にそれが実現するのを見届けることができる。というのも、それが彼らのこれまでの職業経験だったからです。……つまり、こうした人々の職業経験とは、20人から40人のグループを結成し、開発すべき製品を見極め、すぐに着手して作り上げ、2年後には店頭に並ぶ、というものです。彼らは大きな影響を与えてきたのです。そして、その考え方は、彼らが慈善活動にも持ち込んでいるものだと思います。

ハイテク業界の寄付者が慈善活動における「ハイパーエージェント」であるからといって、彼らが常に、あらゆる場面で画期的な取り組みを考案したり実現したりするわけではない。しかし、彼らはそうした取り組みについてより深く考え、その実現に積極的に関与する傾向があることは確かだ。あるインターネット通信企業の共同創業者で、現在は引退している人物は次のように述べている。「私は今、自分のビジョンや目標を具体的にどうしたいかをじっくり考える時間をとれば、それらは実現できると強く信じている。また、それらを書き留めることの重要性も強く信じています。そうすることで、そこに到達するための具体的な一歩を踏み出し始めるため、それらは現実のものになりやすいのです。」

ハイパーエージェントは、起業家精神を特徴づける2つの側面をもって慈善活動に取り組む。第一に、彼らは創造的なアイデアを見出す。つまり、需要が供給を上回っている分野を見極めるのだ。

第二に、起業家は生産を直接指揮することで、投資収益率に積極的に影響を与えます。ハイテク分野の寄付者に特有の特質は、特定の慈善プロジェクトを単に支援するだけでなく、それを実現させる能力にあります。慈善活動におけるハイパーエージェンシーとは、大きな成果を生み出すために資金を投入することです。前述したように、この能力を行使する際、ハイテク分野の寄付者は慈善活動の「支援者」ではなく「生産者」、単なる「寄付者」ではなく「出資者」となる。ニーズは大きいものの資源が乏しい、見過ごされてきた社会的ニッチを見つけることこそが、私たちがインタビューした多くの回答者が明言した戦略そのものである。自らの努力を通じて目標を特定し、それを達成しようとするこの姿勢は、事実上すべてのハイテク分野の寄付者に見て取れる。

西海岸在住の元ヒューレット・パッカード幹部は、頓挫していた自然保護イニシアチブを救い出したことがいかに「刺激的」だったかを語っている。「そのプロジェクトに携わっていた人々は皆、ひどく意気消沈していた」と、彼は森林用地を買い取ろうとしていた個人や団体の状況について語る。しかし、大きな期待に

よる心理的な力と、時空を超えた「^{ンシー}領地」を築くための物質的手段を手にしたこのハイパーエージェントは、計画を立て

、そしてそれを実現する能力を持っていた。それは、ハイパーエージェントではない人々には信じがたいものだった。「じゃあ、この資金を民間で集めてみようじゃないか」と彼は彼らに言った。

「すると彼らは『いや、私有地の保全活動のために1,300万ドルを集めたなんて前例はないよ』と言ったが、僕たちはたった3ヶ月ほどでそれを成し遂げたんだ」彼にとって、可能なことを成し遂げることはやりがいのあることだった。「文字通り一夜にして、これほど広大な地域を守り、オオヤマネコの個体群を保護できたのを見るのは、非常に力強く、やる気を掻き立てられる経験だった。実に感動的だった。」

さらに、この慈善活動の立て直しを専門とする彼は、自身の資金調達における成功を、物事を成し遂げる自身の能力と、その能力を共有する他の「ハイパーエージェント」たちを巻き込む能力に帰している。彼と、必要な1,300万ドルを確保するために彼が巻き込んだ人々全員は、「何かをやることを決めて、2年後には世界中のあらゆる企業で使われるような製品が生まれる——そんな、本当にやりがいのあるビジネス」の出身者だ、と彼は語る。[こうした]

人々は、『ああ、まあ、外に出て何かをすれば、最終的にはそれが実質的にある種の製品になるんだ』と、ある意味で信じている。変化には長い時間がかかるという感覚を持っていないのだ。」そして、これは慈善活動にも当てはまる。「だから、こうした人たちに『私たちに資金を提供してください。そうすれば1、2年後には、あなた自身も他の100人と共に、この2万5000エーカーの土地とオオヤマネコの個体群の保護に貢献し、何かを成し遂げたことになる。つまり、実質的にあなたが生み出した『製品』ができることになる』と伝え、彼らは即座に理解してくれる。彼らはためらうことなく、『いいね、それならそうしよう』と答えたのです。

一般的には、寄付者や大口寄付者という言葉をよく耳にします。しかし、支援者と慈善活動の「生産者」を区別する方が、より実用的な区分と言えます。

ます。あらゆる慈善事業は、社会的なハイパースタートやエンジェルの応える成果を生み出すために、資源を調達しています。ほとんどの個人は、

寄付の呼びかけに応じる際、消費者が企業の製品やサービスに応じるのと同様の方法で反応する。彼らは、はるかに大規模な関係者集団の中の、ただの一人に過ぎない。彼らには、企業に自分たちのために製品を作らせるほどの購買力は個々にはなく、また、寄付先となる慈善事業を創設したり方向転換させたりするほどの寄付力も単独では持ち合わせていない。日常的な寄付者たちが、正式あるいは非公式に連携して行動する集団として初めて、慈善団体の運命や使命を形作ることができる。ある事業の存続や方向性を決定づけるのは、特定の個人ではなく、多くの個人による支援の積み重ねであるため、限られた資源しか持たない個人は、せいぜい共同生産者あるいは付随的な生産者に過ぎない。

ハイテク分野の寄付者が、慈善団体や非営利団体の活動方針を実際に形作るのに十分な規模の寄付を行う場合は、話は全く別になる。この場合、寄付者は「直接的な生産者」あるいは「設計者」と呼ぶことができる。もちろん、このような直接的な生産には一長一短があるため、慈善活動における「ハイパーエージェンシー」が、支配ではなくケアを生み出す条件を見極めることが常に重要であり、これについては後述する。

慈善活動における直接的な生産の極端な例は、独自の慈善団体やプロジェクトを個人的に設立することである。ハイテク業界の寄付者が、私設財団や活動型財団をすでに設立している、あるいは設立を計画しているという事例をいくつか耳にした。ある回答者は、ある学校に対して資金を提供して教師の給与を引き上げる取り組みを始めており、その好影響が波及し、周辺の学校にも同様の措置を講じるよう圧力が生じることを期待している。別の回答者は、今後5年以内に、自身により恵まれた時代に通っていた故郷の都心部で、教師の給与を引き上げるための資金を提供する財団を設立することが夢だと説明している。より非公式な例としては、あるハイテク業界の寄付者が、ダウン症の姪を経済的に「養子縁組」することで、慈善的な成果を生み出したケースがある。また、別の寄付者は、自身と妻の

ンシー

兄弟姉妹全員に十分な額の寄付を行い、収入の必要性ではなく、意義ある生き方を追求したいという願望に基づいて人生の選択ができるような経済的安定を提供している。それが公式であれ非公式であれ、遠く離れた場所であれ身近な場所であれ、「変化をもたらす」という可能性と実践こそが、ハイテク分野の慈善家たちの決意と主導力を支えている。このような「超主体性」は、ハイテク分野の寄付者によるあらゆる慈善活動に浸透しているが、特に、我々が「介入型慈善活動」と呼ぶ3つの形態において顕著に現れている。

「インターセッショナル・フィランソロピー」の諸形態

厳密に言えば、「ベンチャー・フィランソロピー」という類似した概念を生み出した「ベンチャー・キャピタル」という用語は、他者が立ち上げた起業活動を推進するために、投資家が資金や専門知識を多かれ少なかれ積極的に投入し、時には直接関与することを意味する。しかし、フィランソロピーに関連してこの用語を用いる場合、3つの明確に区別できる多面的なアプローチに分類する必要がある。我々は、通常「ベンチャー・フィランソロピー」の範疇に含まれるものの多くが、より正確には「マネジャーリアル・フィランソロピー」あるいは「アントレプレナー・フィランソロピー」と呼ぶべきものであると認識している。

経営的フィランソロピーとは、資金の提供を伴わずに組織運営の専門知識を提供し、慈善団体の有効性を高めることを指す。その一例が、回答者である。彼女の資産は主にシリコンバレーのインターネット系スタートアップに投じられている。彼女は母校であるスタンフォード大学に対し、資金を多少提供しているものの、主に経営に関する専門知識を提供し、資金調達を支援するとともに、より優れた資金調達手法の開発に貢献している。この経営的戦略について、ある元ソフトウェア起業家は次のように詳しく述べている。

私が自分の最大の強みだと感じていたのは、経営面です。私は人を管理することができ、人がどのように働くかを理解しています。全員を同じ枠で分類しようとはせず、一人ひとりの違いを理解しています。純粋な起業家は、たいていかなりひどいマネージャーです。なぜなら、彼らはすべてを5秒で終わらせて、なぜ30秒でできないのかを理解できないからです。「なぜ誰もが自分と同じくらい賢くないのか、なぜ誰もが自分と同じように物事を見ないのか」と、彼らはただアクセルを踏み込んで、できるだけ速く進もうとするのです。私にもそうした傾向は多少ありますが、ブレーキもあることを理解しており、いつそれを使うべきかを知っています。

起業家型フィランソロピーとは、富裕層が人的資本と資金の両方を投じ、新たな慈善事業を立ち上げたり、既存の慈善団体内に新たな部門を創設したりする共同貢献のことである。例えば、オースティンのあるハイテク起業家は、都市部の若者が直面するデジタルデバイドの解消に専念する慈善団体の起業を監督するために、自身の慈善活動資金と時間の大部分を費やしている。より具体的な例として、自らを「社会起業家」と称し、独自の慈善団体を立ち上げている人物が挙げられます：

私にとって、起業家や社会起業家とは、何かが存在しないのを見て「なぜそれが存在しないのか」と考える人のことであり、何かを見て「それはあり得ない」と言う人とは対照的です。私にとっての起業家とは、無から何かを生み出すことを厭わず、現場に飛び込んで手を汚し、変化を起こし、変革を主導し、新しいアイデアや制度、組織を創出し、そこに費やした時間、エネルギー、努力に対して見返りを得ようとする人のことです。社会的リターンは、おそらくコミュニティ・キャピタルや人的資本、あるいは社会資本といった形で測定されるでしょう。たまたま金融資本で測定されないだけですが、そこには依然として、社会セクターに焦点を当てているという点で変わらない起業家的な本能と原動力があるのです。

ベンチャー・フィランソロピーは、介入型の関与における「中間的」かつ第三の形態である。これは、慈善活動に経営上の助言や資金を注入する一方で、起業家の特徴である実践的な日常的な指導には介入しない。ここで私が挙げたいのは、ボストンのソフトウェア起業家です。彼は自身の家族財団を設立した一方で、目標の定義、計画立案、資金の有効活用に関する助言などを通じて、他者が慈善団体を立ち上げるのを支援するために、資金とスキルの両方を提供しています。引退して自身の家族財団を立ち上げた元ソフトウェア起業家は、このベンチャー・フィランソロピーという「中間」の道の好例です：

確かに、私の経歴から得た問題への対処法や考え方は数多くあり、これらは多くの非営利団体と議論してきたものです。私のような人間にとっては当たり前のことである、物事の進め方や意思決定の方法、問題への考え方、戦略の立案方法などには、驚くほど多くのことが含まれています。こうした組織の多くの人々は、そのような視点で物事を考えた経験がありません。ですから、起業家が問題にどう取り組むかについてのちょっとしたアドバイスや洞察は、実は非常に大きな効果をもたらし、彼らを大いに助けるのです。私が例を挙げましょう。私は現在、新しい501(c)(3)団体、つまり新しい組織を立ち上げています。実は私も彼女の理事会に加わり、その組織の立ち上げを全面的に支援することになっているため、今回は例外として扱っています。その判断の多くは、私の支援がどれほど効果的に活用できるかという点にかかっています。週に1時間ほど現場に足を運んだり、電話などで関わったりするだけで、相手に大きな助けとなり、大きな影響を与えられるような状況であれば、私にとっては魅力的な案件です。いわば「労力対報酬の比率」のようなものです。また、私たちが彼女と共同で立ち上げたプログラムでは、彼女のスタートアップ資金の半分をマッチング・グラントとして拠出しています。これもまた、起業家的な取り組みの一例です。私たちがマッチング・グラントとして資金を提供すれば、他の組織に「このファミリー財団が半分を負担してくれるので、残りの半分の調達する必要があります。ご協力いただけますか」と訴える際のレバレッジとして活用できる可能性があります。これは非常に有益です。

インタビューの過程で、寄付者がこれらの各形態を追求している事例がさらに数多く発見されたことから、こうした「仲介的」な慈善戦略の1つ以上を実践することが、ハイテク分野の寄付者の主要な特徴であると結論づけました。また、ハイテク分野の寄付者の活動を正確に描写するためには、「ベンチャー・フィランソロピー」という用語の枠を超えて概念的枠組みを拡大し、経営的フィランソロピーや起業家的フィランソロピーとの重要な違いを浮き彫りにする必要があるとも結論づけました。これら3つのアプローチは、いずれも組織的リーダーシップの実践と、効果性の向上に焦点を当てた姿勢を伴うという点で類似している。しかし、ハイテク分野の寄付者が実際に何を行っているかをより正確に理解し、彼らが追求したいと考えるかもしれない多様な介入的戦略について、よりの確に注意を喚起するためには、マネジリアル・フィランソロピー、ベンチャー・フィランソロピー、そしてアントレプレナー・フィランソロピーの間の違いを認識する必要がある。実際、いわゆるベンチャー・フィランソロピー、あるいはより正確には、様々なベンチャー・パートナー組織に関与するベンチャー・フィランソロピストの将来は、これらのハイテク分野の寄付者が資産を確固たるものにし、フィランソロピーの目的を追求するための時間をより多く確保し、自らの「ハイパーエージェンシー（超主体性）」を発揮したいと考える社会課題や人々を発見するにつれて、起業家型フィランソロピーを中心に展開していく可能性が高い。

結論

本論文では、40年以上にわたる富裕層の研究から得られた中心的な知見について、新たな理論的根拠と応用を交えて論じた。それは、富裕層を特徴づける階級的特性が、ハイパーエージェンシーによる自己形成および歴史創造能力であるということである。確かに、すべてのハイパーエージェントが富裕であるわけではない。経済的には目立たない人々の中にも、深遠さや創造性、あるいは精神性によって歴史を築く者もいる。しかし、慈善寄付を含む物質的な領域においては、すべての富裕層は少なくとも潜在的なハイパーエージェントである。ハイパーエージェンシーとは、富裕層が、自身や他者がエージェンシーを行使する条件を確立したり、実質的に支配したりする能力が強化されていることを指す。大多数の人々にとって、主体性は、自分が置かれた状況の中から選択肢を選び、その制約の範囲内で行動することに限定されている。主体性の支配者として、富裕層はそうした制約を限定し、良し悪しは別として、より自らの設計に沿った世界を自ら創造することができる。日常的な主体者として、私たちの多くは、与えられた可能性の範囲内で、住むのに最適な場所や就くべき仕事を見つけようと努力している。「ハイパー・エージェント」として、富の保有者は——そうすることを選択すれば——、自分や他者が生活し働く可能性の領域を幅広く切り拓くことができる。相続によるものであれ、自力で得たものであれ、相当な経済的余裕を持つことは、幅広い物質的な選択肢と、それに伴う「大きな期待」という道徳的気質をもたらし、それによって彼らは社会における他の主体とは一線を画すことになる。もし金銭の社会的意味が一般的に「主体性」であるならば、富の社会的意味は「ハイパー・主体性」である。

ンシー

マルクスは、その有名な発言の一つで次のように述べている。「人間は自らの歴史を創造するが、それは彼らの意のままに創造されるものではない。彼らは自ら選んだ状況下で歴史を創造するのではなく、すでに存在し、過去から与えられ、受け継がれてきた状況の下で創造するのだ。すべての死んだ世代の伝統は、悪夢のように生きている者たちの脳裏に重くのしかかる。」マルクスにとって、彼の時代には新たな可能性——階級社会の過去の歴史との、真に革命的な断絶——が存在した。もちろん、それは彼が構想した通りには実現しなかった。しかし、歴史を形作るために必要だと彼が述べた要素の一部は、まさにハイパーエージェントを特徴づけるものである。

すなわち、「自らと物事を革命化し、かつて存在しなかったものを創造することに没頭する」者たちは、「世界史におけるこの新たな場面を、古くからの仮装と借り物の言葉で表現するために、過去の精霊を不安げに呼び出し、その名やスローガン、衣装を借りてくる」こと以上のことを成し遂げられなければならないのである。歴史を創造的に形作ろうとする者たちは、「その詩情を過去からではなく、未来からのみ引き出す」ことができる。エージェントたちは往々にして、思考や言葉によって未来を喚起することには成功しても、その内容を成し遂げることはできないという運命にさらされている。ハイパーエージェントは異なる。彼らにとって、「内容は言葉の枠を超えている」（マルクス 1852/1963）。

ハイパーエージェントは、結局のところ、自分自身や他者のために「歴史を創造」するのだ。個人の社会的実践としてのハイパーエージェンシーとは、富裕層が社会的行動を行う条件に対して効果的な支配を行使する能力を高めるとともに、さらに、権限の少ない個人の歴史創造の可能性に対する境界線を設定する能力を指す。ハイテク分野の寄付者は、現代におけるハイパーエージェントの明確なグループである。しかし、彼らや彼らの慈善活動に関するすべてが、多くの人々が示唆するようなほど新しいわけではない。

主観的なレベルでは、彼らは他のすべての富裕な寄付者と同様に、自らの幸運に対して罪悪感と感謝の入り混じった感情を抱いている。また、威信から他者の運命への共感、さらには社会に変化をもたらしたいという願望に至るまで、慈善活動におけるあらゆる動機に駆り立てられており、支配ではなく「ケア」のための特別な能力を適切に活用するよう常に注意を払わなければならない。

また、ハイテク分野の寄付者にとって目新しいことではなく、現在および過去の多くの富裕な慈善家にも共通しているのは、ビジネス原則を慈善活動に応用している点である。ハイテク分野の寄付者が自らの慈善活動の特徴づける言葉遣いは多少独特ではあるが、彼らがしばしば「介入型慈善活動」を追求しているという事実は、決して特異なものではない。我々は、1986年という早い時期から（Schervish and Herman, 1988）、起業家型、ベンチャー型、および経営者型の慈善活動を、旧来の資産を相続した人々や旧来の経済で活動する起業家を含む、あらゆるカテゴリーの慈善家による長年にわたるアプローチとして記録してきた。我々が定義したベンチャー・フィランソロピーは、唯一の、あるいは必ずしも主要な「インターセSSIONナル」戦略ではない。経営者型および起業家型の慈善活動は、それ以上に目立つとまでは言えないまでも、同等に重要な位置を占めている。実際、ハイテク分野の寄付者も、他の資産保有者と同様に、あらゆる種類の戦略を追求していることが判明した。ハイテク分野やその他の新しい分野のフィランソロピストの大多数は、最初の大口寄付の一つとして、高等教育や医療研究への「伝統的な」寄付を行っている。また、仲介型フィランソロピストの中には、ユナイテッド・ウェイへの寄付、親族への支援、寄付の仲介、さらには自身や家族がサービスを利用している宗教団体、学校、博物館などの組織への寄付を行っている者もいる。

他の現代の富裕層や過去の慈善家とのこうした共通点があるにもかかわらず、今日のハイテク分野の慈善家にはいくつかの特徴的な傾向が見られる。ハイテク企業の

経営者は、中小企業経営者、高収入の専門職、相続による富裕層、そして最も鋭敏な市場投資家とは異なる形で経済を経験している。ニューエコノミーにおける彼らの形成期における経験は、概して若い年齢や富への急速な上昇と相まって、彼ら自身とその慈善活動に、特有の関心事、態度、希望、そして落とし穴をもたらしている。我々は、彼らが一つのグループとして、明確かつ一貫して起業家精神にあふれた「ハイパーエージェント」であることを確認した。

彼らは、非営利団体に対し、その奉仕目標を達成するための道筋として、効率性、戦略的思考、イノベーション、リスクテイク、優れた経営、説明責任、測定可能な目標、そして規模の拡大といったビジネス上の目標を追求することを期待し、奨励する傾向がある。彼らは、社会的・組織的な問題を発見し、特定し、取り組み、緩和できるという自信を持っている。彼らには、楽観的でエネルギー、そして問題解決志向のメンタリティが普遍的に浸透している。

彼らは概して、教育と人的資本の育成こそが、社会の問題に対する最良の解決策であると信じている。知識が国家の富であるならば、教育と研修こそがその通貨である。

もちろん、彼らの自信や「やればできる」という姿勢、そして比較的経験が浅いことが、時に傲慢さや独断的な態度につながることもある。しかし、そのような傲慢さの兆候が見られたのはごく稀でした——とはいえ、あらゆる種類の慈善活動を行う「ハイパーエージェント」たちは、過度の影響力を持っているとして、過去も、そして近年再び、激しく批判されてきました。2名の例外を除き、回答者たちはインタビューにおいて忍耐強く率直であり、自分たちが取り組むべきニーズや、そのニーズを満たすために他者とどのように協力するのが最善かについて、自ら学びたいという意欲を圧倒的に示していました。その姿勢や実践において、彼らは直感的に決断力があり、

かつ実験的である。彼らが最初にその能力を注ぐのは、躊躇なく、自らのビジネス上の野望を達成するための最も成功する方法を模索することであり、それこそが実質的な慈善活動を行うための前提条件なのである。個人的なレベルにおいて、彼らの道徳的歩みには、富との折り合いをつけること、家族・ビジネス・慈善活動のバランスを見極めること、意識的に慈善活動におけるアイデンティティを見出し構築すること、そして慈善活動を最も効果的に行うために、自己反省、交流、そして共感の機会を模索することが含まれる。

我々は次のように結論づける。これほど多くの富裕層が、これほど若い年齢で、これほど大きな富と将来への時間を持ち、これほど多くの分野において、これほど起業家的な経験を積んでいる——かつてないほど、彼らは自らの慈善活動について、これほど意識的に「仲介的」であり、意図的に自己反省的である。とはいえ、これらすべてが、彼らが必ずしも慈善活動を通じて大きな貢献を果たすことを意味するわけではない。なぜなら、実質的な利益を生み出す大きな可能性をもたらすのと同じ「ハイパーエージェンシー」が、強引な介入をもたらす可能性も秘めているからだ。「介入的」とあるという両刃の剣は、前述したように、ケアという多大な貢献をもたらす一方で、支配権の横暴な主張をもたらす可能性もある。

参考文献

- アバークロンビー、ニコラス、ブライアン・S・ターナー、[スティーブン・ヒル](#)。
1980. 『*支配的イデオロギー論*』。ラウトリッジ。
アバークロンビー、ニコラス、ブライアン・S・ターナー、および[スティーブン・ヒル](#)。
1986年。『*資本主義における主権的個人*』。Routledge。
アレクサンダー、ジェフリー・C. 1992. 「近年の社会学理論における『エージェンシー』に関する所見」『*Perspectives*』（アメリカ社会学会理論部会ニュースレター）15:1-4。
アーチャー、マーガレット・S. 1982. 『*文化とエージェンシー：社会学理論における文化の位置づけ*』。ケンブリッジ：ケンブリッジ大学出版局。
アリストテレス. 1999. 『*ニコマコス倫理学*』。第2版。テレンス・アーウィン 訳・序文・注釈。ハケット・パブリッシング。インディアナポリス。
コールマン、ジェームズ・S. 1990. 『*社会学理論の基礎*』。マサチューセッツ州ケンブリッジ：ハーバード大学出版局。
エミルバイヤー、ムスタファ、およびアン・ミッシュ。1998. 「エージェンシーとは何か？」『*アメリカ社会学雑誌*』、103(4): 962-1023。
ギデンズ、アンソニー。1984年。『*社会の構成：構造化理論の概説*』。カリフォルニア州バークレー：カリフォルニア大学出版局。
マルクス、カール。1852/1963年。「ルイ・ボナパルトの18ブリュメール」。インターナショナル・パブリッシャーズ、ニューヨーク市。
シェルヴィッシュ、ポール・G. 1997. 「大口寄付者、その動機：大口寄付の背後にある人々とその目的」『*慈善募金の新たな方向性：大口寄付の開拓*』16: 85-112。

シェルヴィッシュ、ポール・G. 2006. 「富の道徳的伝記：慈善活動の基礎に関する哲学的考察」『*非営利・ボランティア・セクター・クォーターリー*』35巻3号（9月）、477-492頁。

シェルヴィッシュ、ポール・G.、プラトン・クツキス、イーサン・ルイス。1994年。『*富の福音書：富裕層が自らの生活をどう描くか*』。コネチカット州ウェストポート：プレガー。

シェルヴィッシュ、ポール・G.、ジョン・J・ヘイヴンズ。2001年。「慈善活動の新しい物理学：慈善寄付の供給側ベクトル——第1部：供給側の物質的側面」。『*CASE International Journal of Educational Advancement*』、第2巻、第2、95-113頁。

Schervish, Paul G. および John J. Havens. 2002 「慈善活動の新しい物理学：慈善寄付の供給側のベクトル——第2部：供給側の精神的な側面」『*CASE International Journal of Educational Advancement*』第2巻、第3号、pp. 221-241。

シェルヴィッシュ、ポール・G. およびアンドルー・ハーマン。

1988年。『*エンパワメントと慈善：富裕層の生き方と寄付の戦略*』。「*富と慈善活動に関する研究*」の最終報告書。

T. B. マーフィー財団慈善信託に提出。

シェルヴィッシュ、ポール・G.、メアリー・A. オヘリヒー、およびジョン・J. ヘイヴンズ。2001年。「主体によって活気づけられた富と慈善活動：ハイテク分野の寄付者における蓄積と配分のダイナミクス」。ボストン・カレッジ社会福祉研究所。『2001年ハイテク分野の寄付者に関する研究』最終報告書。

ンシー
Sewell, William H. Jr. 1992. 「構造の理論：二元性、主体性、および変容」『*American Journal of Sociology*』98(1): 1-29.

ターナー、スティーブン。1994年。『*実践の社会理論：伝統、暗黙知、および前提条件*』。シカゴ：シカゴ大学出版局。

ウッド、エレン・マイスキンス。1995年。『*資本主義に抗する民主主義：歴史的唯物論の刷新*』。ケンブリッジ：ケンブリッジ大学出版局。

ライト、エリック・オーリン。1997年。『*階級は重要である：階級分析の比較研究*』。ケンブリッジ：ケンブリッジ大学出版局。

*ポール・G・シェルヴィッシュ（paul.schervish@bc.edu）は、社会学の名誉教授であり、創設者兼所長を務めた。インディアナ大学フィランソロピー・センターの特別客員教授、およびアイルランド・コークのユニバーシティ・カレッジにおけるフルブライト・フィランソロピー教授を歴任した。また、『*NonProfit Times*』誌の「権力と影響力トップ50」に5回選出されている。2013年には、アメリカ社会学会の「利他主義・道徳・社会的連帯」部門から「Distinguished Career Award（卓越した功績賞）」を受賞した。シェルヴィッシュ氏は著書『*Gospels of Wealth: How the Rich Portray Their Lives*』の著者であり、キース・ウィテカー氏との共著『*Wealth and the Will of God*』もある。ジョン・ヘイヴンズ氏との共著として、1998年の報告書『*Millionaires and the Millennium*』があり、この報告書では、現在広く知られる41兆ドルの富の移転を予測していた。彼らの改訂版富の移転モデルに基づく予測は、2014年の報告書『*Great Expectations: A New Model and Metric for the Continuing Wealth Transfer*』に掲載された。シェルヴィッシュ氏は、個人や家族向けのコンサルタントを務めるほか、富裕層、金融専門家、資金調達担当者向けのフォーラムで講演を行っている。デトロイト大学で古典文学および比較文学の学士号、ノースウェスタン大学で社会学の修士号、パークレーのイエズス会神学校で神学修士号、ウィスコンシン大学マディソン校で社会学の博士号を取得した。